

アメリカ革新主義の精神的風土

——ソーシャル・ゴスペルにおけるグラドンの役割——

児玉佳与子

【要約】南北戦争後の半世紀間にアメリカのキリスト教界に与えられた近代的工業社会と科学的諸思想との挑戦に応答して形成された社会的福音の運動は、右派、左派、中道派など種々の傾向の宗教人多数(主として新教の)によって推進され、革新主義時代に最高潮に達した。普通ソーシャル・ゴスペルの「一父」、「開拓者」などと呼ばれるワシントン・グラドンは、中道派の性格を特に強く備え、その思想や諸提案はソーシャル・ゴスペルの代表的組織の計画の箇条書きに如実に反映されていることによつても、代表的ソーシャル・ゴスペラーといえる。彼は高層批評の成果を受容しつつも聖書の説く義の実現と愛の律法の実行とを強調して、改革の動機づけと究極的目標とを宗教の次元から与え、進化論を逆用して進歩に対する楽天的信念と義務感とを養い、労働者や弱者に味方しつゝ、競争よりは協調を、自由放任よりは公的統制と監督をと唱えて、アメリカの修正資本主義・社会福祉国家への移行をスムーズならしめ、教会を制度教会化し、連合させて近代社会に適応させるために貢献した。史林 四九卷三号 一九六六年五月

一、はじめに

アメリカにおける革新主義運動の宗教的一源泉として社会的福音があることは、多くのアメリカ史家によつて指摘されてきた。たとえばG・マウリは、その著『セオドア・ルーズベルトの時代』の中で、革新主義者達を行動にかり立てた三つの要因の一つとして、時代の知的・倫理的風土

としての、ソーシャル・ゴスペルをあげている。^①

また社会的福音主義者と革新主義者との間に存した、具体的な人的交流の例も多々指摘できる。たとえばセオドア・ルーズベルトがニューヨーク市の警務局長だった頃(一八九五—一九七七年)、彼の方から、当時ソーシャル・ゴスペラーとして有名になりつつあった組合教会派の牧師ワシントン・グラドン(Washington Gladden, 1836-1918)に文通を

求めたことがきつかけとなり、彼はコロンバス市におけるグランドンの教会で都市問題につき講演をした。ひいては一九〇二年無煙炭ストの際、グランドンにはシンシナチ・ポスト紙の要請に応じて、ルーズベルト大統領に調停を依頼する請願書を起草した。その請願書はワシントンに送られたのみならず、多量に印刷・流布されて多くの教会や集会によって採択され、大統領のかの有名な調停を成功させるための圧力の一つとして働いたのである。このように牧師が労働争議調停のために積極的に努力をするのは、すぐれてソーシヤル・ゴスペルのであり、現在もアメリカに時々みられるこのような事例を指して、ソーシヤル・ゴスペルの伝統の存続を指摘した学者も居る程である。^③

本稿はソーシヤル・ゴスペルの定義と展開とを瞥見したのち、特に、代表的ソーシヤル・ゴスペラーと思われるワシントン・グランドン^④の社会観を中心に焦点を絞ることにしよう。グランドン及びソーシヤル・ゴスペルの何たるかをより明確にしよとするものである。

① George Mowry, *The Era of Theodore Roosevelt*, (New York, 1938), pp. 88, 95.

② Washington Gladden, *Recollections*, (Boston & New York,

1909), pp. 329-31, 389-97. この回想風な自叙伝は、グラドンに関する研究書がまだ殆ど世に出ていない今、彼の生涯を知るための重要な第一資料である。

③ スミス・カレンジのアーサー・マン Arthur Mann 教授は、筆者が当大学で勉学中 (一九五七—五九年)、当地のホテル・ノーサンブトにて起ったストに際し、当地の牧師達に同情的共同声明を発表したその事例を授業中にとり上げて、上述のように言及したことがある。

④ グラドンはたしかに「ソーシヤル・ゴスペルの開拓者」(Harold U. Faulkner, *The Quest for Social Justice* (New York, 1931), p. 377) 及び「ノン・ヤン・ホップキンス」(Charles H. Hopkins, *The Rise of the Social Gospel in American Protestantism, 1865-1915*, (New Haven, 1940), pp. 25-26) とか呼ばれてきたし、日本ではソーシヤル・ゴスペラーとしてよりよく知られているラウレン・ミンナ Walter Rauschenbusch (1861-1918) 自身が、グラドンを「ストロン」 Josiah Strong (1847-1916) より Richard T. Ely (1854-1943) の三人を「先駆者」として尊敬している。(John Wright, *Progressive Religious Thought in America*, Boston & New York, 1919, pp. 252-53. に引用文がある。) また、都市計画運動の開拓者アルバート・ショーは、グラドンを次の四点で開拓者思想家だといっている。(一) 社会的行動のためのキリスト教会の連合。(二) キリスト教の原理の近代社会への適用。(三) 近代の学問の光に照したる聖書の再解釈。(四) 進化論の完教への採択。(Albert Shaw, "Washington: Preacher and Pioneer Thinker," in A. Shaw ed., *The American Review of Reviews*, LVIII, August, 1918, p. 203.) さらにグラドンの生誕百年を記念して、一九三六年にアトキンスはグラドンの語提案を「かの時代の唯一の予言者的声」だと思つて扱つた。(Gains G. Atkins, "Washington Gladden and After" in *Religion in Life*, 1936, pp. 597-604.) ウォーレン・ヒュームは著

通ソーシャル・ゴスペルの開拓者だと評価されているが、筆者は本稿において述べてゆく理由から、さらに、あるいはむしろ、代表的ソーシャル・ゴスペラーだと思ふのである。

二、定義と展開

ソーシャル・ゴスペルは、その指導的人物の一人によつてかつて次のように定義された。「イエスの教えと、救いに関するキリスト教のすべてのメッセージとを……個人と同様、社会、経済的生活、社会制度の上にも適用することである」^①と。つまり、それ以前、あるいは同時代のキリスト教が、余りにも個人的、彼岸的であり、個人の魂の救済さえ達成されれば事足りりとしがちであつたことに對する反省として、福音の社会性を強調し、その社会的適用を説いたのである。

ソーシャル・ゴスペルに関する名著を書いたC・H・ホプキンズは、その起源に関して、それは「南北戦争後の半世紀間に、アメリカのプロテスタンティズムに對して加えられた、近代的工業社会の衝撃と、科学的思想の衝撃とによつて生れ……二十世紀の第一次大戦前の樂天的時代〔つまり革新主義運動の時代〕に最高潮に達した」といつている。^②

ここで「近代的工業社会の衝撃」というのは、要するに南北戦争後の高度資本主義化に伴つて、アメリカ社会の工業化・都市化が急速に進み、富の集中、企業合同、独占などの傾向が顕著になる一方、労働者、移民の居住地としての都市の社会的、衛生的環境は不健全を極め、しかもそれを矯正すべき政治が、ボス、金権と結びついて腐敗し、教会もまた無力化・中産階級化していった中で、労働運動、特にストライキが激化していったことの衝撃を意味する。十九世紀の最後の二十年間に、各地でほうはいとして起つたストライキや暴動の中でも、H・メイ教授はとりわけ、一八八六年のヘイマーケット暴動、一八九二年のホームブテッド・ストライキ、一八九四年のブルマン・ストライキの三つが与えた衝撃を、ソーシャル・ゴスペルの形成に對つて決定的に重要だつたと視ている。^③

また「科学的思想の衝撃」といえば、自然科学一般の発達のみならず、特に進化論の出現が、この時代の宗教に一大衝撃を与えたことは言をまたない。また「科学的」社会主義の思想や、聖書の ハイヤー・クリティシズム^④ 高層批評がキリスト教に与えた衝撃も、進化論のそれに勝るとも劣らぬものとしてホプキ

ンズによってとり上げられている。

これらの史家、特にメイ教授は、ソーシャル・ゴスペルの発生に関して、それがいわば外部からの挑戦チヤレンジに対する応答レスポンスとして生れたと見ているといつてよいと思う。この見方の妥当性は、本稿全体を通して検討されるであろう。

ソーシャル・ゴスペルは、比較的保守的傾向から急進的傾向にわたる、種々の傾向の牧師（しかも主としてプロテスタントの）多数によって推進された、中広い運動であった。P・A・カーター教授は、それらの諸傾向を次のように特徴づけている。

個人的、倫理的側面の強調がソーシャル・ゴスペル右派の表現をとり、隣保館 (settlement houses)、『社会奉仕』、スチュワードシップ⑤などによる社会的解決を称揚した。これに対し社会的、あるいは『神の国』の側面の強調が、ソーシャル・ゴスペル左派の表現をとり、キリスト教社会主義の名において社会を根底から再建し直すことを要求した。この両派の間の弁証法的緊張が、ソーシャル・ゴスペル中派を生み出し、ここに運動の主力が存した。⑥

この右、左、中派に分類するやり方は、あくまで後日の

研究者の立場からなされたものであり、当事者達の意識には、派閥のようなものとしては全然のぼらなかつたのであるが、筆者はソーシャル・ゴスペルの流れを把握するための便宜上、このような分類法を一応採用したい。

ここではカーターがソーシャル・ゴスペル中派をもつてどのように特徴づけるのが明確でないが、弁証法的総合シンセシス、つまり左右両極端の止揚されたものとしての総合的、性格をおびていると見ていることは確かである。メイはこの中派を「穩健にして革進的」と規定し、これにのみソーシャル・ゴスペルの名を冠してあとは社会的キリスト教の名で総称する程、この派のソーシャル・ゴスペルとしての代表性を認めている。そしてこの派の社会理論はワシントン・グラドンのそれから発展し、一般的になつたものであるといふ。⑦筆者はこの中派の性格、理論を、より明確に具体的に知るためにワシントン・グラドンに焦点を絞るのであるが、木を見て森を見ぬことのないよう、まずソーシャル・ゴスペルの流れを概観することにする。

ホプキンズはソーシャル・ゴスペルの歴史を(一)播籃期、一八六五—一八〇年、(二)青年期、一八八〇年代、(三)壯年期、一

八九〇年代、(四)円熟期、一九〇〇—一五年とわけているが、筆者もこの時代区分の仕方を一応そのまま継承する。というのには三大ソーシャル・ゴスペラーつまりグラドン、ストロング、ラウンエンブッシュがいずれも一九一八年頃に死亡したことにより、ソーシャル・ゴスペル第一世代の寿命^{ラッシュ・スパン}は大体一人物の寿命と一致している^⑤ので、その意味合いからも、一人物の成長を思わせる上記の名称の附し方は妥当だと思うからである。

(一)播種期。この時期の運動は、一八七二年にポストンでキリスト者労働同盟を組織した組合教会派の牧師ジョーンズ Jesse H. Jones、一八七六年に『労働者と雇用者』という彼の社会観の中で始めての重要な本を出版したグラドン(組合教会派)、同じ年にニューヨーク市の自分の教会で実業倫理について一連の講演をしていた監督派の牧師ニュートン Richard H. Newton の三人によって代表させようと思つた。

ジョーンズはまさにソーシャル・ゴスペル左派の先駆者であつて、その著『天国』(The Kingdom of Heaven, 1871)や、前述の同盟の機関紙『公正』(Equity, 1874-75)と『労

働均衡』(Labor-Balance, 1877-78)とを通し、「金ピカ時代の」保守安泰な一般的風潮の中ではまことに急進的な思想を発表した。たとえば労働者が組合を作り、団体交渉やストライキなどを行う権利を鼓吹し、八時間労働制、婦女子労働の条件の改善、禁酒、協同組合、婦運動などを支持し、現行の「利己主義的個人主義」に代えるに、「キリスト教共産主義」をもってすべしと主張した。また彼は神の国を、「愛という萌芽的原理から完全の域にまで発達せしめられた、人間社会の現世的制度」と規定したが、これは神の国の中心的原理を愛とみなし、現世において実現可能なものとした点で、左派のみならず全ソーシャル・ゴスペルの神の国概念の先駆である。しかし彼の思想は当時としては余りに急進的であつたためか、前述の同盟の機関紙は版路が狭くて二つとも一年程で廃刊になつた。^⑥

グラドンの著作『労働者と雇用者』は、一八七五年にスプリングフィールド市(Mass.)の靴工場で起つたロック・アウトを目撃してグラドンが同市の自分の教会で始めた講演より成る。彼は「資本の侵害から自分達を守るため」の労働者の団結権を卒直に認め、団体交渉権、ストライキ権

さえ認めつつも、労働組合の現行の戦術が「しばしば賢明さを欠き」、益の少ないものである事を指摘し、ストを行う場合でも、それが社会全般に害をもたらさないか熟考の要があるという。また雇用者はよきステューワードたる義務があり、労働者の健康、知的発達、道徳的宗教的安寧や慰安などに對する責任があることを指摘する一方、労働者は正直に良心的に仕事をする義務があるとのべていた。ここには労働者に非常に同情的でありつつもその非を指摘することを忘れず、雇用者にも好意的建言をするなど、兩階級に對して公正であらうとする、いわば中道主義的な彼の生涯に一貫した態度が既にしてみられる。

ニュートンは後に左傾するが、『社会の道徳』という本を書いたこの頃は、実業界の不正直や強慾をつき、自由放任主義の制限を提唱し、より倫理的な宗教の復活を説くなど、ソーシャル・ゴスペルの右派的性格が強い。

ホブキンズはこの揺籃期に、ソーシャル・ゴスペルの四つの基本線がすでに明確化してきた事を指摘している。その一は、古典経済学の批判。特にそれが当然視している競争の原理を非キリスト教的だと非難し、これに代るべき協

力的社会関係が提唱されていること。第二は労働者に對する真に同情的態度の表明。第三は実業倫理の批判。第四は都市問題(特にスラムなど)に對する憂慮である。これらは前述の少数開拓者達には確かに見られる論点であるが、これら以外にもかなり広く諸種の宗教紙によつて言及されたり、教会々議の議事録にのぼったりしたという。¹³⁾

(二)一八八〇年代は、ソーシャル・ゴスペルのいわば青春期。それは反抗と批判を通しての、神学・社会学両面におけるソーシャル・ゴスペルの眞の形成期であり、また活潑な實際活動を通して、より恒久的な組織が形成されかけた時であった。

ソーシャル・ゴスペルの神学的バック・ボーンである「新神学」は正統的カルヴィニズムやリバイバリズム(兩者を合せてグラドンは「旧新学」と呼んでいる)に對する反抗・批判の表現である。それが形成されたのはこの時期であるとホブキンズはいうが、¹⁴⁾グラドンは、一八七〇年代にすでに新神学的著書を發表している。中でも一八七六年出版の『キリスト者たること——それは何であり、いかにして始めるべきか』という小冊子は、ソーシャル・ゴスペルの神

学書の最初のものといわれ、後何回も版を重ねた。この本はキリスト者になる条件として、旧新学がいわば他律的・革命的な心理的感情的体験としての回心を重視したのに対し、誰でも冷静に罪を悔改めて、今ここでイエスに従う決心をし、誠実に努力して怠らなければ、徐々に完全なキリスト者になれるという、いわば自律的・漸新的¹⁶⁾な考え方を展開している。そして神学におけるこの漸進主義は、ソーシャル・ゴスペル中派の場合、その社会思想における漸進主義と一致していることは興味深い。¹⁷⁾

また一八八六年を一つのピークとして労働運動が激化するにつれ、ソーシャル・ゴスペラーによる社会批判も数多く発表された。中でも大きな影響力をもったものに、ストロングの『我々の国』(J. Strong, *Our Country*, 1885)、グラッドソンの『実践キリスト教倫理』(*Applied Christianity*, 1886)、イリーの『キリスト教の社会的局面』(Richard T. Ely, *Social Aspects of Christianity*, 1889)、ギルマンの『利潤共有法』(Nicholas P. Gilman, *Profit Sharing*, 1889) などがある。今これらのすべてについて詳述するわけにはいかないが、この広まりつつあったソーシャル・ゴスペルの考え方の共

通的要因としてホブキンズの挙げる所を紹介するにとどめたい。

ホブキンズは(1)正統的の神学の彼岸的・個人的考え方に對する批判。(2)愛の律法の中でも第二のもの、つまり隣人愛の強調、及びこれを複雑な近代社会に有効に適用するための、社会学的技術の必要性の強調。(3)イエスと旧約聖書の教えに基いたキリスト教倫理が社会関係の規範となるべきこと。(4)救済は倫理的・社会的意味合いで考えられるべきこと。(5)地上における神の国実現が包括的な宗教的・社会的理想として考えられるべきこと。(6)教会とその牧師とが、この新しい社会運動のリーダーシップをとるべく召喚されたという使命感、の六つをこの時代のソーシャル・ゴスペルの共通の考え方として挙げて居る。¹⁸⁾

この時期に活潑になり始めたソーシャル・ゴスペルの組織的運動として、代表的なものを二三あげよう。第一に、プロテスタントの諸宗派が統合への動きを見せ始め、主としてストロングの音頭の下に、それまで半死の状態だった米國福音同盟 Evangelical Alliance of the United States は一八八七、八九、九三年の三回にわたり、ソーシャル・

ゴスペルのための重要な会議を開いた。一八八七年のそれには千五百人程の代表が、八九年の会議には二十三州からの新教十六派の代表五百人が集った。一八九三年の会議にはグラドンや、シカゴにハル・ハウスという隣保館をたてた事で有名なジェーン・アダムス Jane Addams も出席し、方法としての隣保館、スラム改革、制度的教会などが熱心に討議された。また一八八七年の会議の結果として、各地方の実情を、組織化された訪問の形で調査することになった。またこの組織の地方支部がどんどん設立強化されて行き、それらが集って一九〇〇年に設立された「クリスチャン労働者と教会の全国連合会」(National Federation of Churches and Christian Workers) によつて、宗派を超えて連合して社会問題の解決に当らうとする運動が生れた。これこそほのちにソーシャル・ゴスペルの代表的機関となつたアメリカキリスト教会連合協議会「Federal Council of the Churches of Christ in America」の母体とせよ。¹⁹

第二に、経済学者イーリが中心になつて一八八五年に結成したアメリカ経済学協会のメンバーにはグラドンやライマン・アボット Lyman Abbott も含まれ、自由放任学説

にとつて代る経済の探究にいそしんでいた。²⁰

第三にバプティスト教会でも時事問題の討議を行う会議を一八八二年から始め、ウォルター・ラウエンブッシュは一八八八年からこの会議に登場している。²¹

これらの組織や著書の殆んどがヘイ・マーケット事件の一八八六年以後に出現したことは、産業主義の衝撃の強さを物語つてはいないだろうか。²²

(三)一八九〇年代はソーシャル・ゴスペルのいわば壮年期として、その神学、社会観の一応の完成をみた。たとえはグラドンの社会観の中で最も円熟した『道具と人間——キリストの律法下における財産と産業』という本は一八九三年、つまりホームステッド・ストライキの翌年に出版された。また進化論をキリスト教と調和させたグラドン著『現存及び将来の生命に関する切実な問題』は一八九〇年に出版され、聖書の高層批評に対する解答もグラドンの一八九一年の『誰が聖書を書いたか』及び九七年の『聖書に関する七つの難題』なる二冊の本によつて出し尽されて、ここにグラドンの場合における新神学の一応の完成をみたのである。²³

グラドンの神学について述べることは、それだけで他の一章を要する大問題であり、とうていここで述べ尽くすことはできないが、今ここで言及された高層批評と進化論に対する考え方だけでも瞥見することは、ソーシャル・ゴスペルの理解の上で必須であろう。

グラドンは高層批評によって聖書が言語学的・歴史学的・科学的・道徳的に無謬の書ではない事が明らかにされたことを卒直に認めつつ(すなわち基本主義に対する近代主義の立場を早くもとりつつ)、なおも聖書が(1)「この世における義の王国の発展の記録」として、(2)「常に形をかえつつ：人々に新しい角度から真理を提供する」ところの「生きている書物」として、また(3)神・人間・道徳律・人間救済などに関する真理を明らかに示す書物として、いぜんとして「人々を靈感で満たし、神の靈感によって書かれた書」であることを失わないという。^②

以上の(1)、(2)は明らかに進化論を聖書観に応用した事を示している。進化論自体に関してグラドンは、それは種の起源を説明してはいるが、生命そのものの起源は明らかにしていないという。さらにダーウィン自身が否定しなかつ

たように、生命及び世界の第一原因としての神を否定する必要はなく、^③「神の創造の方法は進化の方法である」と想定することも可能なのである。^④有機物の変異と遺伝の法則は、むしろ神の目的と知恵の存在を示唆している。生物学者自身が「あらゆる種スペシヰズは限られた数と種類の変種を生み出す傾向があり」、^⑤変異には「ある予め定められた修正の方向がある」ことを認めており、それ故その過程は神の指導の下にあると考えてもよいとグラドンはいう。^⑥もともと生存競争による自然淘汰・適者生存の法則は人間より下等な動物界の法則であり、^⑦人間には他の動物にはない知性や道徳性が授けられているが故に、人間はそれを使って人間界に敵として存在する道徳律を見抜き、それに従って神を愛し隣人を愛し、神と人との間に調和的協力的関係を保ちつつ、神の国という理想の境地めざして進歩しつづけなければならないとする。^⑧それゆえグラドンの進化論採用は、社会観の上では改革的進化論リフォーマー・ダーウィニズムとなつて表れている。

『道具と人間』には社会改革の方法の体系的提示と、若干の社会主義的提案がみられる。社会主義的というのは、公共事業の国有化と個人の所有できる土地の制限、といつ

た程度の意味合いである。この本の中に見られる社会主義と個人主義の中道を行こうとする意図は、やはり同じ一八九三年に出版されたギルマンの『社会主義とアメリカ精神』の中で説かれている思想とよく似ているし、またこの本の中に提唱された「産業協調主義」もすでにギルマンやニュートンなどによってアメリカに紹介されていた「利潤共有法」の変形である。^⑤

他方、このようなソーシャル・ゴスペルの理論的完成と相まって、そのより急進的な社会への適用が主張された。

その代表的人物はブリス (William Dwight Portes Bliss) であろう。彼は始めは組合教会派、後に監督派の牧師であったが、ヘンリー・ジョージの思想や社会主義に影響されて、すでに一八八八年、ボストンにおいて「労働者の利益促進のための教会連盟」(C.A.I.L.と略称) 結成のために一役買い、翌八九年に最初の「ナショナルリスト」クラブ設立のための一人となり、それにも満足しきれずに同年ボストンで「キリスト教社会主義者協会 Society of Christian Socialists」を結成していた。その機関紙『夜明け』は七年間キリスト教社会主義の主たる代弁者として続いた。この

協会は一八九〇年にやはりブリスによって設立された「大工 (イネス) の教会」Church of the Carpenter に次第に吸収されて行った。ブリスは更に一八九五年には『アメリカン・フェビアン』という雑誌 (その編集者にはベラミヤヘンリー・D・ロイドを含む) を作り、九七年には週期的な『社会改革の百科辞典』を出版し、『キリスト教社会主義とは何か』(一八九四年) を始め数多くの本を執筆し、また各地で精力的に講演するなど、あくなき活動を続けた。^⑥

ブリスや彼の同僚スプリング Philo W. Sprague の説くキリスト教社会主義は、土地と資本の集団的所有・統制を認めてはいたが、それは「同胞主義・協同・有機的集団主義」のことで、温情的干渉政治や政府万能主義ではなく、目的達成の手段として漸進主義をとっていた。^⑦ ブリスはグラドンが言いそうな口調で「現在の産業的・財政的制度を徐々に注意深く変えてその基礎を競争から、民主主義的、兄弟愛的連合にしてゆく」ことを提唱し、そのような考え方を、主として彼が深く信じていた教会を通じて広めようとした。彼は「教会の礼拝と聖式に真の社会主義が、存する」ことを指摘しつつ、とりわけ教会を信じていない

人々を、貧富を問わず自分の教会の集りに招いた。その教会の唯一の基礎は、神の子たる大工イエスであつて、彼こそは「天にいます父のことと、我々は皆兄弟であることを教え給うた」といった。^② ブリスらの考えをここで述べ尽すことはできないが、結局彼らは何よりもまずクリスチャンであつて、それと矛盾しない限りにおいて社会主義者であつた。従つて、鋭い資本主義批判と、社会改革の方法（土地、鉄道、電信・電話およびすべての資源の国有化、光熱の公有化など）と、改革者精神とを社会主義からとり入れたが、その唯物史観や無神論、また暴力による革命論などは拒否した。ブリスはまた、グラドンと同じくこの時代の「支配的な思想」——神の内在性、社会の有機的連帯性、神の国の現存性——をも奉じていた。

これに対して、やはり一八九〇年代に活躍したアイオワ州のジョージ・ヘロン (George Herron) は、遙かに急進的思想の持主であつた。人民主義に強く影響された彼は、正式に社会党に入党した数少ないソーシヤル・ゴスペラーの一人である。一八九一年に組合派教会の牧師となつた彼は、九三年にランド (Rand) 夫人という金満家の教会員の出資

と推せんによつて、アイオワ大学に新たに設けられた実践キリスト教倫理の講座をもつことができるようになった。

彼はキリストの自己犠牲の倫理に従つて教会は社会を再建設すべきだと唱え、キリストの政治的出現を説いて、社会主義を全面的に奉じたが、実際の救済案については殆んど何も言及しなかつた。彼の思想を代弁する『神の国』(The Kingdom) という週刊紙は、一八九四年から五年間続いて、最高二万の読者があつた。この機関紙の最大の重要性は、そこに寄せられた記事や手紙を通して、種々のグループが統合され、「キリスト者共和植民地」(Christian Commonwealth Colony) という共産主義的共同体を、ジョージア州に実現させる役割を果したことである。参加者は三―四百人。千エーカーの土地に一八九六年から数年続いたこの実験は、その機関雑誌『ソーシヤル・ゴスペル』(読者約二千人)によつて、ソーシヤル・ゴスペルの名を海外にまで有名にしたといふ。^③

『神の国』は一八九九年に『社会討論』という雑誌にひきつがれた。同紙は同年ブリスによつて翌年の選挙で共和党を破るための改革的政党を結成しようとした人々を集め

て作られた「社会改革同盟」の機関紙である。勿論この政治的試みは失敗したが、この雑誌の読者は一時は五千人に達し「キリスト教の唯一の政治的結果は社会主義」とまで極言したが、僅か十七ヶ月で廃刊となった。

このように華々しいが短命の急進的運動に比べて、静かだがより重要に思えるのは、一八九二年にバプティスト派内で組織された「神の国の同胞体」 Brotherhood of Kingdom の働きである。ラウシェンブッシュ、ウィリアムズ (Leighton Williams) シェミット (Nathaniel Schmidt) など十二人の牧師の友情から生れたこの組織は、その名の意味する考え方をこの世に広め実現する助けをすることを目的として毎夏集会を催し、社会・時事問題を神の国との関聯において論じ合った。この討論の過程においてラウシェンブッシュは、後にソーシャル・ゴスペルの最も洗練された神学として表現される諸思想を成熟発展させていったという^⑧。その内容は後にグラドンとの比較においてふれるであろう。

(四) 円熟期。一九〇〇年から第一次大戦迄は、ソーシャル・ゴスペルが教義的にも組織的にも真に円熟して、アメリカ

のプロテスタント教会内における指導的地位を公認された時期である。

まず教義的にいえば、この時期に出版されたおびただしい数のソーシャル・ゴスペルの文書の中でも、特にすぐれていたのはラウシェンブッシュの『キリスト教と社会危機』(一九〇七年)、『社会秩序のキリスト教化』(一九一二年)、『イエスの社会的原理』(一九一六年)、『ソーシャル・ゴスペルのための神学』(一九一七年)であった。彼に関しては比較的よく日本でも知られているし、彼の思想は根本的には非常によく、グラドンあるいはプリスのそれと似ているので、後者が紹介されつつある以上、ここでこれらの書の一々について詳述する必要は少い。ただグラドンとの違いとして次の事を述べておきたい。

ラウシェンブッシュの神学は、グラドンのそれをもう少し右傾化(『旧神学化』)し、社会観はグラドンのそれをもう少し左傾化(『共産主義化』)したものと見えよう。神学の右傾化というのは、例えばラウシェンブッシュはグラドンの廃棄した原罪観を信じていたらしいこと、終末論において千年王国が悪との激しい戦の後きたると考えていたことな

などを意味する。また社会観においては、前者は「共産主義」を近代社会がそれに向って必然的に動きつつある一つの理想境とみなしている点、確かにグラドンのそれより左に寄っている。だが共産主義的の制度として彼が意味する所のものは、家庭・学校・教会であつたり、せいぜいブリスの意味の社会主義である事を知れば、グラドンの思想とさして違わない事がわかるであらう。

この時期の組織的運動の中で、まず左派的なものとしてのキリスト教社会主義者団体^{フレイシツプ}について一言する必要がある。この団体は一九〇三年に生れた『キリスト教社会主義者』という雑誌^③に寄せられた手紙などを通じて、一九〇六年にできた団体で、「社会主義は宗教的生活の経済的表現であることを示す」のを目的とし、国際的社会主義の原理に従い、社会党支持を唱導した。百六十人の牧師によって署名され一九〇八年に発表されたその宣言^{マニフェスト}の一つは、「貪慾の罪に基いた」現存社会秩序は、「宗教によって教えらるる倫理的生活を不可能にした」が、社会主義は宗教の実行に有利な環境を作り出すであらうと述べている。^④

このように左派の動きが活潑であつたことは、この時期

に社会党がアメリカ史上最大の勢力を示したことから容易に肯んぜられる。にも拘らず左派はソーシヤル・ゴスペルの性格を代表しているとは考えられない。なぜなら組織化されたメンバーの数からいっても、運動の永續性からいっても、次に述べるアメリカ・キリスト教会連合協議会(Federal Council of the Churches of Christ in America)に勝る団体はなかつたからである。そしてそれは左右どちらにも偏らない思想を表明してからである。

このFCCCAは、一八八〇年代から始まつた宗派統合の動きの、まさに結実である。^⑤一九〇八年にその第一回の集会が開かれた時、それは三十の宗派を代表していた。労働問題・移民問題・家庭生活・国際関係などに関する討議が熱心になされた他、A.F.L.の五代目の副会長をしていたヘイズD. A. Hayesも臨席するも、労働者と教会の利益のために特別な集會が催された。この時出席した労働者の数は、開催地フィラデルフィアでかつて集つた労働者のどの集りよりも多かつたとは、ヘイズの觀察である。このようにFCCCAは、あらゆる機会に親労働の態度を表明した。^⑥

この FCCCA は、専門家を雇つて社会学的技術に基いた調査やストの仲裁などの社会的活動を活潑に行つた。それは四年毎に全国的集会を開き、その計画を簡条書きにして発表した。中でも一九一二年のそれは一九三二年迄変えられなかつたが故に重要である。今その要点を次に紹介することは、ソーシャル・ゴスペルの社会的信条・計画を具体的に明確に知るために必要であると思う。

「教会は次のものの実現のために立たねばならない」として、一九一二年の簡条書きは以下の十六綱目を挙げてゐる。1. 完全なる正義と平等なる権利。2. 家庭の保護(特に各州同一の離婚法や適正な住宅計画によつて)。3. あらゆる児童の可能な限りの最大の発達。(特に適切な教育、娯楽の提供によつて)。4. 児童労働禁止。5. 婦人の労働条件改善の法的制定。6. 貧乏の減少と予防。7. 禁酒。8. 健康の保持。9. 労働者の、危険な機械や職業からくる病氣、死からの保護。10. 万人の自活の保証。失業保険。11. 労働者の老年金、災害保険。12. 労働争議の適切なる仲裁と解決のための手段として、被雇用者も同じく組織化する権利。13. 一週六日制(つまり安息日の確保)。14. 労働時

間の可能な限りの減少。15. あらゆる産業における最低賃金制と各産業が可能な限りの高賃金。16. 財産の獲得と使用に対するキリスト教的原理の適用。生産物の最も公平な分配。そして「最後のメッセージはこの世における個人の贖い、またその個人を通してのこの世自体の贖いである。どちらか一方の贖いなくしてはどちらの贖いもあり得ない」と附加している。^④

① Shailer Mathews, "Social Gospel," in Shailer Mathews and G. B. Smith, *A Dictionary of Religion and Ethics* (New York, 1921), pp. 416-17. ② S. Shailer Mathews, *The Social Gospel* (Philadelphia, 1910) の著者による。

③ C. H. Hopkins, *op. cit.*, p. 3.

④ Henry May, *Protestant Churches and Industrial America* (New York, 1949).

⑤ 高層批評 Higher Criticism とは、聖書の原文の回復を目的とする本文批評の上に立ち、聖書そのもの並びに各書の成立、性質、特徴、著者、著作の年代と場所などを取扱う、文学的、歴史的批評であり、十八世紀後半から十九世紀にかけて急激に発展し、それまでの聖書絶対無謬説などをくつがえすに至つた。

⑥ Stewardship とは、富者は社会のよき執事として、貧者が自分自身で富を使う場合よりもよく、自己の蓄積した富を貧民及び社会全般の福祉のために使うべきだとする思想で、カーネギーの「富の福音」(一八八九年発表)の中にその代表的表現を見た。しかしこの思想自体はピエリタンの遺産であるといわれている。たとえば John Winthrop, "A Model of Christian Charity" 参照。

⑥ Paul A. Carter, *The Decline and Revival of the Social Gospel*, (New York, 1956), p. 15.

⑦ May, *Protestant Churches*, p. 170.

⑧ 勿論ワリス (W. D. P. Bliss, 1886-1926) のように、一九二〇年代まで生きのびて活躍する人も居るが、一般に一九二〇年代にはソーニャル・コスネルは衰退したといわれている。(カーターの前掲書参照) 筆者はその原因のまだ指摘されていない一つとして、この指導的^⑨第一世代の死去ということもあるのではないかと思う。

⑨ この同盟は、ジョーンズを始め数名の改革者達が、ニューイングランドの労働者の窮状を改善する目的で集った集会からでき上ったもの (Hopkins, *op. cit.*, p. 42) といふから、その成立の事情には、産業の与えた衝撃がよみとれる。

⑩ ジョーンズに因つては Hopkins, pp. 42-49, Arthur Mann, *Yankee Reformers in the Urban Age* (Cambridge, Mass., 1954), p. 87-89 参照。なお神の国概念と具体的諸提案とにおおむねジョーンズとグラッドンには共通性があるが、グラッドンがジョーンズから影響を受けた可能性が強い。ところがジョーンズの『天国』が出た一八七一年から七五年迄、グラッドンは『ニューヨーク・インディペンデント』誌の宗教記事の編集者であり、当時「天国を地上にもたせよう」として「運動」を能う限りよく知り解釈しようとした、と後に述懐しているからである。⑪ Gladden, *Recollections*, p. 83.

⑪ Washington Gladden, *Working People and Their Employers* (New York, 1876), ch. VIII, etc.

⑫ Hopkins, *op. cit.*, pp. 32-3.

⑬ *Ibid.*, p. 35.

⑭ *Ibid.*, ch. III.

⑮ Ralph H. Gabriel, *The Course of American Democratic Thought* (New York, 1940), p. 259.

⑯ Washington Gladden, *Being a Christian: What It Means and*

How to Begin (Boston, 1876) この考え方には Horace Bushnell, *Christian Nurture* (1847) などの影響が見られる。グラッドンは一八六〇年代にマッシュネルや F. ロバートソンなどの著書に接し、新しい神学、新しい世界に対する目を開かれた、と喜んでいる。Gladden, *Recollections*, 119.

⑰ 因みに新神学は progressive orthodoxy とも呼ばれている。そして筆者はこの progressive という言葉には、後述するように、進歩的という意味と同時に漸進的という意味も含まれていると思うのである。そしてこの progressive orthodoxy は、特にグラッドンの場合、正統的カルウエニズムと、ユニテリアニズムや理神論との間の、中道主義的色彩が非常に強い。(四、注②参照) しかもグラッドンの社会観にも、個人主義と社会主義の間の中道主義がみられるのは、偶然の一致ではないように思う。

⑱ Hopkins, *op. cit.*, pp. 105-106.

⑲ *Ibid.*, p. 116 を中心とした第六章。及び 303-304頁。

⑳ *Ibid.*, p. 116.

㉑ *Ibid.*, p. 112.

㉒ それ以前のものでも、たとえばグラッドンの『労働者と雇用者』執筆の事情、ジョーンズのキリスト者労働同盟成立の事情(本節注⑨参照) などには、産業主義の与えた衝撃がみられる。

㉓ もっともこれらの新神学的要素の集大成的表現は『今日の神学』(一九一三年)においてであり、更にラウレンツシュの『ソニャル・コスネルのための神学』(一九一七年)において、その最も洗練された表現をみるのであるが、グラッドンの場合、一八七六年から始めて、神学と社会学は常に手を携へ合つて、同時に形成されていったことが特徴的である。

㉔ Washington Gladden, *Who Wrote the Bible?* (Boston, 1891), pp. 328-63.

㉕ Washington Gladden, "The New Bible," in the *Arena*, IX

- (Feb. 1894), p. 295.
- ② Washington Gladden, "Christianity and Science," in the *Journal of Christian Philosophy*, II, (New York, 1882), p. 146.
- ③ Gladden, *Who Wrote the Bible?* p. 331.
- ④ Washington Gladden, *Burning Questions of the Life that Now is, and of that which is to come* (New York, 1890), p. 25.
- ⑤ Washington Gladden, *Present-day Theology* (Columbus, Ohio, 1913), pp. 12-3.
- ⑥ Gladden, *Burning Questions*, pp. 22-3.
- ⑦ Washington Gladden, *Applied Christianity* (Boston, 1886), p. 104.
- ⑧ Gladden, *Burning Questions* 及び *Washington Gladden, Was Bronson Alcott's School a Type of God's Moral Government?* (Boston, 1877), etc.
- ⑨ キルマンの穩健な、中道主義的態度は、マン教授をしてキルマンを「キルトンのシムソン」といわせしめた。(Mann, *Yankee Reformers*, pp. 84-5, 97-8.) しかし影響關係はむしろキルマンからシムソンへ、ではなくかと思われる。ところがシムソンの著作の中には「キルマンの名が言及されたところからである。
- ⑩ W. D. P. Bliss に関するのは Hopkins, *op. cit.*, ch. X-VI Mann, *op. cit.*, pp. 90-101 にならべられる。
- ⑪ Hopkins, *op. cit.*, p. 180.
- ⑫ *Ibid.*, pp. 176-78.
- ⑬ *Ruling Ideas of the Present Age* (Boston, 1895) という本はグラットンによって書かれ、賞を得て有名になった。
- ⑭ この試みはチブスと不作によって一九〇〇年に解散した。ヘロン自身の影響力も、翌年彼がランド夫人の娘と再婚してイタリヤへ渡って以降、急速に衰えてしまった。 Hopkins, *op. cit.*, ch. XI.
- ⑮ *Ibid.*, pp. 131-34.

- ⑩ Walter Rauschenbusch, *A Theology for the Social Gospel* (New York, 1917), p. 32-3.
- ⑪ *Ibid.*, p. 224.
- ⑫ Walter Rauschenbusch, *Christianity and Social Crisis* (New York, 1907), pp. 388-400.
- ⑬ この隔週毎の雑誌は、一九〇九年迄に二千の牧師の読者を得、第一次大戦後につぶれる迄、最高二万の発行部数をもった。エージン・V. デブス Eugene V. Debs やラウレンソン Lammie, その寄稿者であった。
- ⑭ Hopkins, *op. cit.*, pp. 236-43.
- ⑮ 前述97頁の「クリスチャン労働者と教会の全国連合会」は、一九〇五年に各宗派公認の代表五百人を集めて全国的集會である、「連合会」に関する「教会間會議」を開いた。この會議こそは、「ここに代表を出している各宗派内部の賛同が得られた場合、アメリカキリスト教会連合協議会を結成することを可決したのである。
- ⑯ *Ibid.*, p. 309.
- ⑰ *Ibid.*, pp. 316-17.

三、グラットンの社会観

次にグラットンの社会観に主として焦点を絞るに当り、第一に彼の現状把握、第二に原因の追求の仕方、第三に改革の目標、第四に改革の方法と具体的提案及び成果について瞥見し、同時にそれらと彼の神学及び生涯との關係も、紙面の許す限り言及してみたい。けれどソーシャル・ゴスペルは何よりも牧師達の運動であって、彼らの実践と神学と

を抜きにしては論じられないからである。

(一) 現状把握。一般にソーシャル・ゴスペラーは改革の手法や哲学においてよりも、現状把握、批判において、そのリアリズムの故にすぐれていたといわれるが、^①グラドンとでも例外ではない。彼は若い頃雑誌の編集を手がけたり、^②一八九二年には組合教会派が主宰する二種の産業問題調査会の委員長を務めたり、一九〇〇年から僅か二年間ではあったが、オハイオ州コロンバス市の市会議員に選ばれて市政の実際に携ったりした社会的活動家であった。のみならず彼自身が自分の教会員や、教会に出来ない労働者などを対象にしてアンケートをとるなど、常に民衆の意見や生活の事態を適確に把握しようと努力していた。そのためか彼の現状把握の仕方は多くの場合、ここでは一々挙げぬが、客観的データに基いていた。

彼の現状把握を簡単に要約すると次のようになる。いうまでもなく、彼は産業問題・都市問題を「最も差し迫った問題」とみなし、^③これらについて最も多く発言した。彼は『実践キリスト教倫理』（一八八六年）において、南北戦争後、国富は著しく増大したのに、それを生み出すために

最も力あった労働者の実質賃金は殆んど上らないどころか、一部低下の傾向さえ見せ、富は少数金満家の手に著しく集中したことを、不正義・不公平の状態とみなした。しかもこれら比較的少数の金満家が立法府・裁判所、党大会などを操って、金力でこれらの既得権益を擁護し、政治権力を根源から毒していることを非難した。^④またさまざまな方法で自己の利益の増大のみをはかる鉄道のやり口は、「近代における最も巨大な専制の一つ」だと慨嘆した。のみならず雇用者側は、自ら合同して種々の独占体を形成し、これによって自由競争は事実上崩壊してしまった。^⑤このような情勢下にあつては

労働者もまた、その正しい要求のために団結する権利を誰が否定しえようか。団結は争いを意味し争いは確かに非常な悪ではある。しかしこれは最大の悪ではない。この世の仕事に励む人々の恒久的零落こそはより大きな悪であろう。もし団結によって賃銀労働者が、彼らを圧迫している傾向に抵抗でき、増大しつつある富に應じての分け前を得る権利を主張し維持できるなら、彼らを団結せしめ、万人をして然りといわしめようではないか。^⑥

この演説は一八八六年、クリーブランド市におけるストの調停役を頼まれたグラドンが労働者と雇用者の双方を前にしてなしたもので、「Is it Peace or War?」と題され、彼の社会観を表わす名著『Applied Christianity』の中に収録された。その底には第一に、労働者にもその働きの結果の当然の分け前を与えよとする正義観、第二に労働者の人間としての零落を真に悲しむ心、第三に彼らが合同化した資本家勢力に対する均衡を実現するために団結するのは当然だとする考え方、第四にこの世の不遇者が自らの足で立ち上って、当然の権利を享受できるように道を開いてやるのは社会人一般の義務だとする考え方などが見られると思う。そして彼の発言に常に共通して流れるこの主調キョウイクトのそれぞれの因子は、彼の奉じていた神学や、身を浸していたアメリカ民主主義の伝統と深い関係があると思われる。今この両者の関係についてももう少し考察してみたい。

第一に正義観に関してだが、グラドンの神学においても、正義は非常に大きな位置を占めていた。前述した一八七六年の神学書の中で彼は、「義こそはキリスト者にとつての出発点であり、ゴールである」と強調した。^⑧ また高層批評

の成果を認めつつも、彼は聖書の残存価値サバイバルバリューの一つを、「義の発展を記した書」とみなしたのであった。また彼の神の国概念の中では、J・ジョーンズの強調した愛だけではなく、義も重要な要素となっている。(後述)

第二に働く者の経済的・精神的零落に対する怒りと悲しみの裏には、働く者に対する兄弟としての愛情と、いかなる人も神の子たる資格と可能性を有するが故に、その資格を侮辱し、可能性を窒息させるような状態に放置されてはならないという信念とがある。一般にソーシャル・ゴスペラーは、万人が兄弟たること Brotherhood of all men と、万人の父としての神 Fatherhood of God と、神の国の地上実現 Kingdom of God on earth という信念を、社会改革の重要な動機インセンティブづけとして有するのであるが、特にグラドンの場合、労働者に対する兄弟愛には、単なるお題目を越えた親身オウジのものが感じられる。それはおそらく、印刷工として働いた彼の若い頃の経験や、幼くして父を失い、祖父の農場で一日中働いても半セントしかもらえなかったという経験にも基くものであろう。事実この辛い経験は、「低賃銀で雇い人を圧迫する行為に対して敏感になつた始

まり」だと彼自身のちに述懐している。^⑩

第三に労働者が雇用人の合同化の傾向に対抗するために団結するのをグラドンは当然視した事を述べた際、筆者は敢えて勢力均衡を実現するためにといった。なるほど自己の労働の結果の正当な分け前を要求して団結する限り、それは正義実現のための闘争であり、この意味でも確かにグラドンは労働者の団結権・スト権・団交権などを支持した。

しかしこの時点において、合同化の著しい雇用人側の勢力に対抗しうるだけの勢力を、労働者側が獲得することは当然だという考え方がグラドンにあったことは、彼がいかに均衡 (equilibrium, balance) を尊ぶ言辞をしばしば呈していたかを知ればいえると思う。例えば彼は『道具と人間』の中で「我々キリスト者の仕事の成功は、二種類の活動の間に均衡を維持することに大きくかかっている。進歩は同等の勢力のバランスを保持することでしばしば条件づけられる。文明が減びたり遅滞させられる多くの場合はこの均衡の保持に失敗するためである。」^⑪と述べている。ここには伝統的に抑制と均衡を尊ぶアメリカ民主主義の影響がみられると思う。それ故グラドンにとっても、他の殆んど

のアメリカ人と同様、労働者勢力のみが強くなってプロレタリアートの独裁を実現するというような極端な思想は肯定できないのである。あくまでも資本家勢力と対等の立場を築かせるための労働者の団結の是認であって、その上で調停や団体交渉を通じて、闘争よりは更に望ましい平和のうちに和解しお互の存在理由と権利とを尊重しつつ、協力、協調関係を社会のあり方の基盤として打ちたてて行くことこそ、より人間的、キリスト教的、進歩的ではないかというのが、グラドンの一貫した論法である。^⑫それ故、彼の志向する社会体制は、せいぜい修正資本主義の域を出ないといえよう。彼自身の言葉でいえば「個人主義と社会主義のどちらか一方のみが社会組織のために安全な原理を提供するとは思わない。我々の必要とするのは、この二つの原理を対等関係に保つこと (Coordination)^⑬」なのである。いわば個人主義と社会主義の中道を行くということである。

第四の主調である、この世の不遇者が自らの足で立ち上って、当然の権利を享受できるように道を開いてやるのは、社会人一般の義務だとする考え方は、ソーシャル・ゴスペラーがその実現のために貢献したとみなされる、社会

福祉国家の精神につながると思う。但しグラドンの場合、

自助自立を尊ぶ心が国家や社会の責任を重んじる心と最後まで併存するのである。^⑤これは彼が過渡期の、彼自身多少

混乱した思想家であつたためもあるが、アメリカの強い個人主義の伝統に浸されていたためでもあろう。

話をグラドンの現状把握について戻すと、彼はまた当然ながら、失業、貧困、労働者や青少年の不健全な娯楽・生活環境、離婚の増大に見られる家庭生活破壊の傾向、児童、婦人労働の搾取、売春、飲酒、賭ばくなどの諸社会悪の実情によく通じていて、これらの改善のために生涯を通じて発言し続けた。これは彼がウィリアムズ・カレッジを一八五九年に卒業してまもなく、結婚してニューヨークもブルックリンの組合教会の牧師として赴任したそもその始めから、「都市の挑戦」に直面し、それを「生涯を通じての問題」として取り組んだという、彼自身の言葉を裏書きするものである。^⑥彼はその後も常に工業化しつつある都市の牧師として、八二年の長い生涯中、半世紀余を過した。その間のアメリカにおいて著しく進展した産業主義のはね返りとしての諸問題を、いかに敏感にうけとめ応答して

いったかは、すでに見たごとく、社会観に関する彼の著者が殆んど産業上の大事件の後に出版されていることからもわかる。

グラドンはまた、教会が中産、上流階級のもものと化して労働者を疎外しつつあつた傾向をいち早く見抜き、労働者が教会に來ない理由をアンケートによって具体的に見出したのであつた。それは労働者と雇用者の間に増大しつつあつた、生活水準、生活感情両面の離反を如実に反映してゐた。^⑦また教会が労働者街を嫌つて、中、上流階級と共に郊外へと逃げる傾向があつたのに反対して、グラドンは自らの教会を、町の雑沓の唯中に建て、それをいち早く制度・教化(後述)したのであつた。

(二)原因の追求。以上のように把握した現状の原因追求に當つて、グラドンは多くの場合、単純素朴であつた。しかしかし彼は従来の牧師がし勝ちであつたように、失業とか貧乏とかの原因を、当事者の罪とか神の摂理とかのせいばかりにはせず、一応社会体制の中に求めていた。グラドンによれば、現行の「賃銀体制」は労働を商品化するが故に非人間的、非キリスト教的である。しかも現在の社会体制

は競争の原理の上に立っている。「競争は生存競争であり……闘争を意味し、闘争の法則は最強者の勝利である。」

「このような法則は下等な動物のものであり、産業社会の法則として採用されたものである。」競争は自己の利益を追求するという、反社会的・反キリスト教的原理に基いている。「この世のビジネスは、自己の利益という基盤の上に組織されているのであるから、競争の過程において、雇用者と被雇用者の利益が正面衝突するのは当然である。」^⑧自己の利益を追求して競争するのを自由放任することを前提とする限り、現行社会制度の悪の最奥の根源は、人間の心の中にある利己主義である。トラストとか、会社とか、労働組合とか、資本主義そのものが悪いのではなく、人間の心の中に荒々しくはびこる利己主義こそは社会悪の根源であるという。^⑨

グラドンの神学において、罪とは根本的には、愛の律法に対する人間の意識的叛逆であった。愛の律法が二重であるように、罪もまた二重の様相をもつ。すなわち「汝の心を尽し、精神を尽し、思いを尽して主なる汝の神を愛すべし」との第一の愛の律法への叛逆が、精神的存在にして物

事の第一原因なる神からの離反、つまり物質主義・拝金主義・肉慾などとなって現れる。また「おのれのごとく汝の隣を愛すべし」との、第二の愛の律法への叛逆が、利己主義に他ならない。^⑩

社会悪の根源が罪に見出された以上、社会の改革の第一歩も基本的には個人の罪の悔改めから始められなければならない。こういうと非常に因襲的に聞えるが、グラドンの場合新しいのは、前述のいわば自律的・漸進的回心（その個人の罪も社会の一員としてよりよく自覚されるのであるが）のみをもって足れりとはせず、進んで社会・国家すべてをキリスト教化し改革しようとする企図であり、それを通して自由放任制を、より公的な統利監督によって漸次に代置せしめようとする意図であった。しかし今は改革の方法について詳述する前に、改革の目標について述べてみたいと思う。

(三)、ソーシャル・ゴスペルにおける社会改革の究極的目標は、すでに示唆されたごとくこの地上に神の国を実現することであり、それは今述べた個人をキリスト教化することと密接に関連している。グラドンはよく「社会をキリスト教化する」「個人を社会化する」と^⑪いったが、社会をキ

リスト教化するためには、まず個人個人をキリスト教化せねばならず、逆に個人が罪を悔改めてイエスの愛の律法に従うことは、「隣人愛」の手前必然的に個人が社会化されることを意味した。また神の国の地上実現という点、それは社会全体の救済を意味するものであるがゆえに、非常に社会的なイメージを伴うが、「神の国」によって意味された所ものを追究してゆくと、それは個人の救いの状態と一如であることがわかる。

「神の国」とはグラドンによれば、人が道徳律に完全に従い、神と合一する (union with God) ことにより、「魂が神性を共有するようになり、それ故、聖・健康・平和などがその永遠的属性となる」時にきたるといふ。ここで健康を神の国の一属性としてあげているのはいかにも衛生的環境の実現に心を砕いたグラドンらしい。勿論肉体的健康だけでなく、神との調和的關係から来る心の健康のことも彼は含めていたであろう。「平和」——これも、正義の実現のためには労働争議もやむを得ないとしつつも、さらに、闘争よりは協調、競争よりは協力が望ましいと説いた彼の社会思想を、よく反映した属性である。そしてこれらの属

性は神との合一によって結果されることの中に、調和を愛する彼の人格、リベラリズム的楽天主義などがみられると思う。

このように神の国は、イエスのいったように、何よりも「汝らの中にある」ものなのであった。それはそもそもイエスによって指し示され、追い求めるべく命じられたものである。グラドンは、イエスが伝道の始めに「まず神の国と神の義とを求めよ」と述べたことを重視する。グラドンはまた、「神の国は完全なる精神性・道理性 (reasonableness)、義・愛から成る。キリストの言葉がこの国の法律であり、キリストの精神がこの国の生命である」ともいふ。しかも「愛の律法が……神の国の有機的法律である。……人々がそれに従う程度だけ、それだけ神の国は来たるのである」と述べている。つまりは神のみこととの一致や人々との調和的關係から由来する、精神的・肉体的至福の境地こそは、グラドンらソーシャル・ゴスペラーの社会改革の究極的目標であり、それに向って人間社会が徐々に進化したのであると信じられた理想境なのである。

(四)最後に改革の方法と具体的提案であるが、それは結局、

上述のような究極的理想に向ってまず身近な所、つまり個人の感情から始めて、理論（考え方）・習慣・制度・法律・そして政治そのものを漸次にキリスト教の精神・原理・律法で浸透させてゆくべきだといふのである。^②

今この単純素朴ともみえる計画の具体的に意味する所のものを、すでに述べた所と重複しない程度重点的に述べてみたい。

グラドンは競争より協調が基調になっている社会の具体的なあり方として、生産組合や産業協調主義をしきりに提唱した。産業協調主義とは、雇用者と労働者の関係はパートナーシップであるべきであり、（グラドンはこれをキリスト教の論理と呼んだ。けだし万人皆兄弟という一大定理から導き出されるからであろう。）従つて会社の利益も損害も共にわかち合うべきだとする。そして会社の運営を労働者にも監視させ、能力に依りては経営にも参加させ、かくして労働者の手のみでなく頭も心も使うことによつて、彼を単なる歯車の一つとしての地位からひき上げようといふのである。しかし人間の能力には生れつき差があり、経営者に適した能力の持主は、その能力と創意を最もよく發揮できる個

人企業の経営者になるべきだといふ。結局グラドンの場合、産業協調主義は、個人企業のよさを生かしつつ、大工場制の欠陥を改善し、労働者に希望と活気を与えようと意図した提案であつたといえよう。

グラドンの具体的貧民・失業・牢獄対策は、やはり悩める者に対する隣人愛・兄弟愛の提唱からひき出される。まづ貧民対策に関しては、彼は従来の個人的慈善のやり方を鋭く批判する。^③しかし牧師による貧民個人の訪問という伝統的形式は、これを否定しないどころか、かえつて教会員全部が分担して組織的にこれを行うべきだと提案した。その際最も必要なのは、物質的援助よりむしろ精神的援助、つまり彼らの友として語り合う中に、彼らを孤立感や劣等感からひき上げ、同じ神の兄弟として自尊心・自立心をふるい立たせることだとグラドンはいつた。^④

彼の失業対策はまず失業者を働く意欲のある者となし者に分類し、前者には個人や教会を通じて職を探し与えるのは勿論、職業安定所のようなものを作つて公的に職をあっせんすべきだと提案している（後述）。後者には国家の力による強制労働のようなものの必要さえ彼は暗示するのであ

る。^②

グラドンはまた、牢獄をサナトリウム式に改善し、罪人の心・身・職能すべてを更生・教育する機関とすべきだと提案した。^③

インステテューションアル・チャーチ

制度教会の提案は、勿論制度のキリスト教化の範疇に入る。

これの意味する所は、教会は純粹に宗教的行事のためだけでなく、教養を高めたり、社会奉仕をしたりする場、健全な娯楽のできる社交的な場としても開放されるべきだといふのである。普通一八八〇年代のポストンのバークレーテンブル (Berkeley Temple) における、タッカー・Tucker 氏の試みはその嚆矢とされているが、グラドンはすでに一八六〇年代に、教会は「社会のすべての高尚な利益 (Higher Interests) のために奉仕すべきだ」と考えて、手始めにエマソンのような著名文化人に講演に来てもらっているのである。^④今日のアメリカの教会は非常に制度教會的だといえよう。

教会こそは、家庭や学校と共に、よりキリスト教化されるべき制度だとするグラドンは、更に進んで教会の、宗派を越えた連合を提唱し、その実現に力あったのは前にもふ

れた通りである。^⑤

その他グラドンは、習慣のキリスト教化として過度の飲酒や賭ばくの禁止、スチューワードシップや隣保館の奨励、などもしたが、より重要なのは、理論のキリスト教化として、革命より改革を、と提唱したことである。これは彼が社会を一個の腐った家と見なすよりは、有機的な、一個の草木か人体とみなすべきで、従って根こそぎ倒して建て直すよりは部分的な治療や、漸進的な生命力の更新をはかるべきだと考えていたためである。^⑥このような社会観は、たしかにキリスト教の教会観 (キリストを頭とする肢体関係) の延長とみなすこともできるが、社会有機体説の影響もあると考えられる。

最後に国家のキリスト教化に関してであるが、一八九三年の『道具と人間』においてグラドンはすでに次の十五項目を政府のなすべき事柄として提唱している。(1)最も地位の低い・貧乏な・弱い市民を援助し保護すること。(つまり福祉国家の実現。)(2)公明正大な正義の実現。(3)独占体の抑制。(4)すべての市民に平等の機会を与えること。(5)工場・鉱山などの衛生検閲。(6)労働者の健康と安全の保障。(7)日

雇労働の禁止。(8) 酒場と売春宿の禁止。(9) 労働時間の(特
 に婦人、子供の) 短縮。(10) 労働争議の調停。(11) 鉄道・電報・
 市電・ガス・電気事業など、すでに独占化され、しかも公
 共の性格をもつ事業の国有化。(12) 個人が所有できる土地の
 制限。(13) より重い遺産税と、累進所得税の賦課。(14) 義務教
 育の確立。(15) 失業者・貧民・犯罪人・博徒などを減少させ
 る法律・制度の制定。^⑧ 一八九七年の『社会の事実と力』に
 おいて附加されたものとしては、(16) 職業安定所の設立。(17)
 児童労働の禁止。(18) 会社に対する「厳格な監督」の実施。
 但しこれは会社がその財産を社会のよきスチュワードとし
 て管理できない場合に限る。(19) 牢獄のサナトリウム式改善。
 (20) スラムの除去・更生。^⑨ その後の本においても同じような
 提案は繰り返されている。

① Hopkins, *op. cit.*

② 前節註⑩参照。また彼は一八七八年から八一年まで『日曜の午後』
 (七九年に『よき仲間』と改名) という雑誌の編集をしていた。

③ その中の一つ「資本と労働に関する委員会」は、後さまざまに名称
 を変えつゝ、(一九〇一年には「労働委員会」、二〇年代には「社会奉
 仕」とか「社会関係」に関する委員会、一九三四年には「社会的行動の
 ための組合教会協議会」など)、ソーシャル・ゴスペルの衰退したとい
 われる二〇年代においてさえ労働社会問題に関するセミナーや調査活
 動を主宰し、またストライキに道義的支持を与えたりした。Robert

M. Miller, *American Protestantism and Social Issues, 1919-39*
 (Chapel Hill, N. C., 1958.), p. 236. Carter, *The Decline and
 Revival of the Social Gospel*, p. 176.

④ Gladden, *Recollections*, p. 337.

⑤ Gladden, *Tools and the Man*, p. 116. 442 Washington Gladden, *Social Salvation* (Boston, 1902).

⑥ Gladden, *Applied Christianity*, 120-23; Gladden, *Social Salvation*, p. 105.

⑦ Washington Gladden, "Social Problems in the United States," *Subjects of the Day*, II, (1891), p. 196.

⑧ Gladden, *Applied Christianity*, p. 124. 442 *Recollections*, pp. 300-1.

⑨ Gladden, *Being a Christian*.

⑩ 例へば Gladden, *Present-day Theology*, pp. 336-37; *Tools and the Man*, pp. 2-3.

⑪ Gladden, *Recollections*, pp. 1-68.

⑫ Gladden, *Tools and the Man*, pp. 2-3.

⑬ 特々 Gladden, "Is It Peace or War?" in *Applied Christianity*. また本節註⑤に引用した文及び註⑥がとられた箇所は、彼が私企業、従つてその経営者の存在理由をどうに求めていたかを示す一例である。

⑭ Gladden, *Christianity and Socialism* (New York, 1905), p. 122.

⑮ 同書二二六―七頁においてグラッドンは「我々の持たねばならぬ社会は、独立した、明確な思考のできる、主体性のある (self-reliant) 人間、自分自身の足で立ち、自分自身の考えをのへ、人間の福祉の総計に彼自身の貢献をするような人間から成り立つ」といふ、「このよ様な人間を造るために私有財産と私的企業は大切であると私は考える」ともいっている。また本節註⑥を付した箇所参照。

- ①⑨ Gladden, *Recollections*, p. 91. ㄥㄥㄥ John W. Buckham, *Progressive Religious Thought in America* (Boston, 1919), p. 216.
- ①⑩ Gladden, *Applied Christianity*, pp. 149-57.
- ①⑪ *Ibid.*, p. 104; Gladden, *Working People*, p. 34; Gladden, *Recollections*, p. 299.
- ①⑫ Gladden, *Present-day Theology*, p. 77.
- ①⑬ *Ibid.*, pp. 67, 74, 163. ㄥㄥㄥ Washington Gladden, *The New Industry* (New York, 1905), p. 3.
- ①⑭ Gladden, *Tools and the Man*, pp. 16-19. ㄥㄥㄥ Gladden, *Social Salvation*, p. 233.
- ①⑮ 以上、神の国概念は Gladden, *Burning Questions*, pp. 223-45. ラウンエンブロンは神の国実現をソーシャル・ユスマルの中心的な課題として重視するが、彼によれば神の国とは「神に向つてのすべての純粋な熱望と、人生の完成に対するすべての真の希望」とを包含する所の、地上における神の義的諸力の総和であるといつてゐる。
- ①⑯ Gladden, *Tools and the Man*, pp. 16-19.
- ①⑰ *Ibid.*, pp. 207-210.
- ①⑱ Gladden, *Social Salvation*, pp. 33-35.
- ①⑲ Gladden, *Social Salvation*, pp. 37-60, 87-8, 112, 161.
- ①㉒ *Ibid.*, pp. 37-60.
- ①㉓ *Ibid.*, pp. 87-8, 114-24.
- ①㉔ Gladden, *Social Salvation*, pp. 87-8.
- ①㉕ Aaron I. Abell, *The Urban Impact on American Protestantism, 1865-1900*, (Cambridge, Mass. & London, 1943).
- ①㉖ Gladden, *Recollections*, pp. 121.
- ①㉗ Gladden, *Social Salvation*, pp. 12-16.
- ①㉘ FCCCA が発足するための準備段階であつた一九〇四―七年まで、グラドンは組合教会全国協議会の議長として活躍し、その間ロッキンフエラーからのこの協議会に対する十万ドルの寄附の申し出を、「汚れ

た金」として断り、勇名をさせた。Survey, XL, p. 436. また彼は一九一四年にロンドン、ス市にできた「教会と宗教団体の総協会の規約を自分で起草した。Washington Gladden, *Federation for Service*, (Philadelphia, Boston, 1914) pp. 16-7. シュリンは一九一二年の FCCCA 計画簡条書の起草には高齡のためか直接参加しなかつたらしいが、このように教会の連合のために活躍し有名な彼は「これに対する影響を及ぼせなかつたはずはない」と考へる。

①⑱ Gladden, *Social Salvation*, pp. 53, 207.

①⑲ *Ibid.*, pp. 4-6.

①⑳ Gladden, *Tools and the Man*, pp. 284-302. これらの中①⑱などは一八九二年に提示された人民党の政策綱領にも見出される所から、グラドンは人民党運動の影響をもうけたと考へられる。

㉑ Gladden, *Social Facts and Forces*.

四、結 び

本稿第三節に紹介されたグラドンの諸提案・諸思想と、第二節の最後に挙げられた FCCCA の計画の簡条書とを詳細に比較検討すれば、後者の項目中、グラドンが提案した事柄を、何らかの意味で反映していないものは殆んど一つもないことがわかるであろう。FCCCA はソーシャル・ユスマル運動の最大にして最も長続きのした組織であることを思い、またその提案が穩健にして漸進的であり、左右両極端のどちらにも偏らず、しかも巾広い綜合的性格をもつ

ていることを見る時、グラドンのソーシャル・ゴスペルにおける中派的・代表的性格は明らかである。

では彼は開拓者であったかといえ、確かにいち早くソーシャル・ゴスペルの(特にその中派的)思想を発表しているが故に、開拓者の一人であったとはいえよう。しかしジョンズやギルマンから受けたと覚しき影響(二、注⑩、⑪、⑫)とい、彼の著述にみられる引用文の多さとい、彼がそれ程独創的な思想家ではなかった事を示している。それゆえ彼の本領は開拓者としてというより、更に、あるいはむしろ代表的ソーシャル・ゴスペラーとして、世論を啓蒙し導いたことにあると思う。彼は産業主義・社会主義・進化論・高層批評などの、環境、思想両面からの挑戦に刺戟され、それらに悩む人々の必要に答えるために、手早く手早く古今の思想を吸収し、それを彼の穩かな性格や常識的な頭腦の濾過紙を通過させ、キリスト教のみならず、合理主義、ヒューマニズム、民主主義の多元的な原理の網の目からなるふるいにかけて、彼のわかり易い、説教調の、時として詩人的な表現法を通して世に発表するうちに、一般のアメリカ人が最もついて行き易い、兩極端の中道を行

くような神学や社会観を同時的に形成していったといえると思う。その中道主義は弁証法的な意味の綜合として(つまり否定の否定というような激しいダイナミックなプロセスを経て)というよりはむしろ、既存の相反する意見や利害を和解させ、それらの最も調和的併存を実現せんとする、すぐれてアメリカ的な意味でのキリスト教的、民主主義的文化の型の産物であったとみる方が妥当であろう。

ホプキンスはソーシャル・ゴスペルを「アメリカ独自の貢獻」であったというが、類似の社会的、神学的動きが欧州の他国にもなかったわけではない。ただそれが実際に政治を改革する運動、つまり革新主義運動と結びいた点、確かにアメリカ独自のものであった。

なおソーシャル・ゴスペラーの諸提案の中には、その内容、趣旨が一部のにもせよ革新主義の時代の諸立法に実現をみたといえるものが少なからずあり、さらにニューディール期にこの意味で実現されたものもある。今日でもまだ実現をみないものも少しはある(鉄道、電信、電話の国有化など)が、殆んど全部が今日のアメリカ生活の中の当り前なこととして実現されていることをみる時、その悔り難い力

を知るのである。

結局ソーシャル・ゴスペルは革新主義運動の精神的風土として、それに進歩革新のための究極的目標(神の国)と漸進的方法と具体的提案とを示唆し、個々の市民をして身辺の社会悪を少しでもとり除き不遇者を助けるための動機づけを、宗教という深みの次元(特に万人皆神の子、皆兄弟という考えや、愛の律法を實行してこの世に神の国を實現せんとする考え)から与え、それによって高度の産業主義、資本主義が生み出した矛盾や社会問題を和らげる役割を果たした。それは資本主義を批判しつつ修正し、アメリカの修正資本主義、社会福祉国家への移行をスムーズならしめたとはいえないであらうか。

① 聖書の高層批評や進化論に答えた前述の諸著作は、これらの新しい思想の挑戦に悩む教会員に伝えるためにグラドンが用意した講演がもとになってできている。(Gladden, *Recollections*, 318-24.) また彼の他の主要な諸著作は殆どが、種々の大学に依頼されてなした講演、及び彼自身の教会や、客員チャブレン(一八九三年)としてのハーバード大学礼拝堂における説教などから成立している。また小冊子類は始め種々の雑誌に掲載され、後単行本となったものが多い。これらのことを知る時彼は思想の挑戦にも選境の挑戦に対すると同じように敏捷に应答、対話し、それらに悩む同時代人の必要に精一杯答えて行く中に、彼のソーシャル・ゴスペルを形成したといえるようである。

② グラドンは旧神学における恣意的・専制的神の概念と、キリストの刑罰代行論と、予定説、原罪論などを廃棄したが、これは皆彼の思考の鋳型が具備した合理主義・ヒューマニズムのふるい、に合わなかったためと思われる。代りにグラドンは慈愛に満ちた父としてのヒューマニステックな神の概念を導入し、また自己愛を他人への愛と同じ位必要なもののみならず、「おのれのごとく汝の隣を愛すべし」との教えをあたかも文字通り五分五分に他人と自己を愛せば足りるとするような、合理主義的解釈をみせている。その結果彼の神学はカルヴィニズムとユニテリアニズムの中間を行くような形になっている。

③ Ralph H. Gabriel が *The Course of American Democratic Thought* に記す「現実主義的民主主義は諸種の利害あるいは圧力団体の間の衝突から起る問題に対し、中道主義的解決を与える。その方法は互譲である。その普通の解決法は妥協である」といふ、さらに「民主主義的信念は、自由な個人、国家主義、基本法という、潜在的には相反する教義を調和させようという努力の結実である」と述べているのは非常に暗示的である。筆者は傍点の箇所を個人主義、社会主義、道徳律(特に愛の律法)といふかえる時、ソーシャル・ゴスペル中派の性質が非常によく表わされるのではないかとさえ思っている。

なおこのような民主主義は英国にも存する(その意味でアングロサクソンのといえよう)が、よりアメリカ的だと思ふのは筆者のみの主観であろうか。またキリスト教は勿論欧州諸国にも存するが、弁証法神学はアメリカでは欧州大陸諸国で受ける程受けてはいない。そしてアメリカでは早くから信教の自由が確立し、他に比類のない程プロテスタントの分派が乱立併存している。これは弁証法的思考方法そのものがアメリカ人には余りびびりたり来ず、「あれかこれか」ならぬ多元的アプローチが早くから容認され、アメリカにおけるキリスト教がこゝに述べたような性格を特に強くもってきているためではないかと筆者は思う。

④ Hopkins, *The Rise of the Social Gospel*, p. 3. 類似の運動とは例として英國の牧師モーリス・マウリス & キングズレー・キングスレーによる実際の活動、オクスフォード大学生によるフライング・ボーホル運動のアメリカにおける隣保運動への影響 (Faulkner, *American Political & Social History*, p. 482 参照)、フライングにおけるストックトン・アドルフ・ストックトンによる労働・社会立法の提案 (ルッター派の保守主義のため失敗) や、リチャード・リットシル、ハルナック Harnack による自

由主義神学の完成など。(Williamston Walker, *A History of the Christian Church* (Edinburgh, 1939), p. 518 参照)
⑤ その理由としては、アメリカでは牧師が社会活動に携わる伝統が特に強かったためであろうが、人間の努力による神の国の地上到来の実現性が、建國以来の一種の使命観と結びついてかアメリカにおける程強く広く信ぜられたことはなかったためと思われる。

(元梅花女子大学講師)

period of the Umayyads.

In this article, considering the speciality in the *hadith* literature and making the best of historical works by the conquered Christians, the author explains what system of taxation was established in Egypt under the Arab conquest.

A Mental Climate of American Progressivism

—the Role of Gladden in Social Gospel—

by

Kayoko Kodama

The Social Gospel movement, formed in response to the challenge of the industrialism and of scientific thoughts given to American Christendom during the half century after the Civil War, was pushed forward by many ministers (mainly Protestant) with various inclinations that ranged from conservatives, radicals and middle-of-the-roadists.

Washington Gladden, commonly called "the father" or a "pioneer" of the Social Gospel, was essentially a man of the middle-of-the-road, and may be called a representative Social Gospeler as well, because, his views and proposals were mostly taken into the 1912 Formulation of the Programs of the most representative organization of the Social Gospel, *i. e.*, the Federation of the Churches of Christ in America.

Accepting the major achievements of the Higher Criticism, Gladden emphasized the importance of realizing the righteousness and the law of love taught in the Bible, and gave the incentive and the ultimate goal for the social reform from the religious dimension. He made use of the evolutionism to inculcate the optimistic faith in, and the sense of duty for, progress. Speaking for the rights of the laborers and the poor, he preached that cooperation was better than competition and that more public control and supervision should take the place of *laissez-faire*. Thus he helped smoothen the way of America towards the revised capitalism and the social welfare state, and contributed to the institutionalization and combination of the churches in America in the process of their adaptation to modern society.